

Title	近世日本の市場経済：大坂米市場分析一
Author(s)	宮本, 又郎
Citation	大阪大学, 1988, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/35772">https://hdl.handle.net/11094/35772</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【1】

氏名・(本籍)	宮 本 又 郎
学位の種類	経済学博士
学位記番号	第 8019 号
学位授与の日付	昭和63年3月9日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	近世日本の市場経済 —大坂米市場分析—
論文審査委員	(主査) 教授 原田 敏丸
	(副査) 教授 作道洋太郎 教授 竹岡 敬温

論文内容の要旨

本論文は近世の大坂を中心とした米市場の構造と機能を研究することによって、わが国近世における市場経済の成立とその展開過程の重要な局面を明らかにしたものである。

本論文は近世日本の市場経済研究の課題と研究史の動向を論じた序章に続く2部8章および結語からなり、第1部(第1～4章)では大坂米市場を中心として領主米流通の制度史的分析がなされており、第2部(第5～8章)では大坂米市場の経済的機能が種々の角度から検討されている。まず第1章においては近世初頭以降における領主米の流通状況、蔵元・掛屋などその担い手の動向、大坂蔵屋敷の成立とその整備過程、大坂市場の構造などにつき検討した上で、西日本諸藩に加えて北国諸藩の大坂廻米が本格化するとともに、藩役人や初期豪商に代わって新興商人層が蔵米の販売に主役を果たし、米市など卸売商業機構が出現した寛文一元禄期に幕藩制的全国市場としての大坂米市場が成立したと主張している。

第2章においては、元禄期から文政期に至る諸藩年貢米の大坂登高を検討することによって大坂米市場と各藩領主経済との関係を追究し、大坂は西日本諸藩の領主米市場であると同時に北国諸藩も大坂市場に相当のシェアを有していたことを実証的に明確にしている。その場合、大坂への登米率が高く蔵屋敷方式という直接的蔵米販売方法をとるが、藩にとっては大坂市場への依存度が低い九州・中国地方の領国型諸藩と、大坂登米率が低く、蔵元・用聞方式という間接的蔵米販売方法を取り、藩側にとっては大坂市場が重要な意味を持っている近畿地方の非領国型諸藩とに類型化を試みている。

第3章は主として江戸期・明治初期の商慣習書に依拠して大坂米市場の中心機構である大坂蔵屋敷と堂島米会所における取引仕法の全容に照明をあて、まず蔵屋敷における払米仕法につき、登米から蔵出

しまでの過程を詳説し、ついで堂島米会所の成立過程と同会所における正米商内と帳合米商内の仕法を明らかにしている。とくに物流機能を果たした正米商内と価格形成機能を委ねられた帳合米商内の併存によって生ずる価格保険機能の意義を再確認すべきことを主張している。

第4章においては米の生産地農村に最も接近した米流通機構の事例として、非領国地域である藩州東部加古川流域諸村から大坂に至る運輸上の中継地である高砂への年貢米の輸送状況を取りあげ、領主米流通機構の中でも収集過程について考察し、年貢米収集過程には数か村を一単位とする合理的かつ精巧な廻送・集荷・計算のシステムやルールが存在したことを明らかにしている。

第5章においては近世中後期大坂米価の年内変動・月内変動・季節変動を分析して、米価の短期変動のコントロールという面に関する限り、18世紀中期～文化・文政期の大坂米市場は近代の農産物流通市場と対比し得る先駆的な機能を果していたこと、ただし、大凶作期や幕末の混乱期においては緩衝機能が十分には働かなかったことを明らかにしている。

第6章においてはまず全国米価の動きと大坂越年米高を指標とする大坂市場における米需給との関係を考察し、ついで諸藩の大坂蔵屋敷における毎年の蔵米供給量決定につき蔵屋敷の米切手供給関数を計測している。その結果、大坂での米需給や諸藩の年貢米販売行動にはもとより貢租販売という封建的性格があるとはいえ、地域間米価の動き、大坂における米の市況、先物価格の動きに現れた期待の要素等々にも影響され、年貢米流通には明らかに市場経済法則が働いていたことを指摘している。

第7章においては堂島米会所における正米価格と帳合米価格の動きを分析することによって帳合米取引の価格平準化機能や価格保険機能が実際に働いていたことを実証すると同時に、天保期以降はこの両機能に障害があったことを明らかにし、このような状況が大坂市場の後退につながることを示唆している。

第8章においては全国16か所における米価の年変化率の相関関係を分析した結果、少なくとも18世紀初頭以降西日本では統一的米市場が存在していたのに対し、東日本では統一的市場圏を形成するには至っていないことが、年代的には18世紀中葉から19世紀初期までは全国的米市場のネットワークがかなり緊密であったのに対し、天保期以降弛緩するに至ったことを明らかにしている。

以上を要するに本論文は近世における市場経済の仕組みと機能を当時最も重要な商品であった米を対象にし、近世の経済循環構造の中で枢要な位置を占めた大坂を中心にして追究したものである。

## 論文の審査結果の要旨

本論文の第一の特長はわが国近世の経済において最も中枢的な役割を担った大坂を中心とする米穀流通に関して、従来多数の先行研究がありながら部分的にとどまっていたものを集大成し、独自の研究を加えて登米にはじまる領主米流通の全過程、なかんずく蔵屋敷の払米仕法と堂島米市場の取引仕法の全容を明らかにしたことである。第二の特長は米価変動に関する数量史的分析に基づいて大坂米市場の経済的機能について前人未到の実証研究を展開している点にあり、本論文で用いられているきわめて洗練

された数量的方法はわが国における物価史研究方法の最高水準を示すものである。

第三の特長としては本論文の随所において幾多の創見を打出していることである。たとえば大坂市場成立時期を寛文一元禄期に確定したこと、知行形態と登米率をめぐる類型化、大坂米市場の価格コントロール機能を抽出したこと、大坂における米需給には市場経済法則が働いていたこと、堂島米市場における帳合米取引の全機能を実証的に明確にしたこと、統一的米市場の成立に関する西日本地域の先導性を主張していること等である。

以上は本論文がわが国近世の市場経済史研究上多大の貢献をなすすぐれた研究成果であることを示すものである。論文組立の上で整備・補充を要するところも若干残されてはいるが、数々の新しい知見と分析方法ならびに構成上の独創性を有する本論文は近世経済史の分野で高い評価を与えられるべき業績であり、経済学博士の学位に十分値するものと判定する。